

# 北海道大学総合博物館

## ボランティア・ニュース No.16

### 2010.3

特別寄稿 **ネスパ?の長尾先生(その4/4) 最終回**

何でも物事は続くものと見えます。デスモチルスの研究のさなか、今度は、カラフトの中生代白亜紀の地層から恐竜化石が見つかりました。デスモチルスは新生代中新世の生物でしたから、一挙に一億年近くもさかのぼった化石が登場してきたわけです。カラフトは当時日本領で、日本では恐竜化石はそれまで見つかったことはなかったので、これはニッポノザウルス(日本竜)と名づけられました。ニッポノザウルス・サハリネンシス(カラフト産の日本竜の意)と呼ばれたのです。ニッポノザウルスは、ハドロザウルスに似た草食の恐竜です。はじめに得られた化石は、かなり骨が揃っていたものの、前足の部分が出ていませんでしたので、教室の人々には、“手がでない”と冷やかされたそうです。長尾先生は、またもや、すぐに発掘に出向かれ、残っていた前足の部分を採取されました。これで“手が出せる”と仰言ったそうで、なかなか茶目っ気もある人だったのですね。この研究は、最近まで日本産恐竜の研究論文としては唯一のものでありました。



ニッポノザウルス化石骨格標本  
(北大総合博物館)

長尾先生は謹厳実直の士という印象がありまして、ネスパ?とはすぐ結びつかない感じがあります。剣道3段で、宝生流の謡曲を趣味とする方でした。几帳面な

**北大名誉教授・総合博物館資料部研究員 加藤 誠**

性格で、お部屋はいつもキッチンと整理されていたそうです。講義も原稿を作り、掛け図や標本などを準備して丁寧になさり、謡で鍛えた音声で朗々と話されたと聞いています。前に書いた大立目、斉藤さんの他に、カラフト地質調査を通じて藤岡一男さん(のち秋田大学教授)も指導されました。北大で最後の頃の弟子に、湊 正雄さんがいます。なお、藤岡、湊さんはフィールドでの長尾先生の姿を書いておりますが、とても早足で元気な方だったそうです。

先年亡くなった学士院会員、松本達郎氏との共著の白亜紀イノセラムスの研究も、長尾先生の有名な仕事で、ベースとなった標本は、北大博物館の宝です。

長尾先生は1941年、東北大学に新設された東亜地質学の教授として母校に戻られました。福岡出身の長尾先生は、東京高師、仙台の東北大、ついで北大へと移られたので、次はもっと北のカラフトか?と仰言っておられたそうですが、南下して仙台に往かれたのでした。しかし、不幸、病を得られ、胃がんで1943年8月28日にお亡くなりになりました。52歳でした。

北大での昼時には、店屋物をとって会食をなさるのが恒例だったようですが、長尾先生は、夏にはひやむぎ、冬は大谷屋の鍋焼きと決まっていた、決して変わらなかったというのですから、おどろきです。

長尾先生については、私の恩師、湊 正雄先生と熊野純男さん(元理学部講師)からお話を伺っておりました。熊野さんは、生前の長尾先生を知る数少ない人です。また、箕浦名知男さん(元博物館助教授)は、長尾先生に関する資料を集めてくださいました。川村信人さん(理学部准教授)は、長尾先生について学会で報告されたことがあります。

ご家庭ではやさしい父親、教室では親切な教師、営々とたゆみなく精進する研究者、豊かな趣味人であった長尾先生は、万人に敬われ、慕われる、我々にとって理想の人物像に合致するように思われるのです。ネスパ?

(完)

\*\*\*\*\*

## 各分野の活動紹介・他

### 「私と黒曜石」

考古かぶれの少年時代、武蔵野の関東ローム層を歩きまわり、土器の破片や石斧・石鏃(黒曜石のやじり)を見つけては、悦に入っていたのが今思えば黒曜石との最初の出会いであったようです。その後社会人となり、十勝管内の音更町に某乳業会社が進出するための新工場建設に携わった時、基礎穴を掘った残土の山に、子供の握り拳大のあばた状の円礫が沢山出土しているのを見つけました。何気なく手に取って見ると重機のショベルが円礫の地肌を欠いた箇所から漆黒の光る面が目を引きました。地質屋の目で再度注視すると、それは素晴らしい光沢を放つ黒曜石との再会でした。この一瞬は、それも私にとって幻の黒曜石である朱色が入った「花十勝」となれば感激もひとしおでした。暇を見つけてはバケツを持って残土山を漁り「花十勝」を重点的に拾っていましたが、工事に来ている地元出身の作業員には、「ゴミ石」拾いと嘲笑され、それを哀れに思った一人が大きな黒曜石を、プレゼントしてくれたのには驚くと共に、十勝石の純正品を手に入れた喜びで一杯だったことを、今でも記憶しています。残念ながら現在これらは全て行方不明でプレゼントくださった方には、大変申し訳なく思っています。

その後黒曜石との出会いは全くありませんでしたが、一昨年の夏、ふとした事から、北大総合博物館に鳥取大学名誉教授吉谷先生から寄贈を受けた黒曜石の引取りのお手伝いをしたのが縁で、今度は黒曜石と本格的な付き合いをする事になりました。寄贈された黒曜石を分類整理し、博物館とは別途で貰い受けた年少者向けの石器製作セミナーで使う黒曜石を、一時的にアインシュタインローム三階の回廊に、年末ぎりぎり滑り込み展示させる事が出来ました。昨年は、黒曜石を使った石器作りの博物館セミナーや、同じく子供セミナー開催のお手伝いをしたりしたので、もう黒曜石との付き合いは御用納めと思っておりました。

しかし今年に入って、旧理学部地鋳教室のプレハブ倉庫を整理中、破損した埃まみれの昔の木製リング箱と平箱に入った黒曜石が偶然見つかりました。

いやはや三度目の正直ならぬ四度目の正直で、又々黒曜石のお世話をする気配がして、この発見には正直困惑気味でした。

発見された木箱は、白滝遺跡の出土品で一部破損し、鼠の被害にも遇っていましたが、厚紙袋を新聞紙

### 化石・地学ボランティア 寺西辰郎

で二重に包装してあった石器類を、ビニール袋に入れ替へし整理したのち資料室に収納しました。パソコン入力も完了し作業は一段落し安心したのも束の間で、黒曜石が入っていると思われる木箱が都合 15 箱も出て来ました。何れも嚴重に梱包されて、「函館市本町五稜郭公園内市立博物館宛」の宛名書きがあり、詳しい整理を依頼しようとしたと考えられますが、何らかの理由で未発送なのか、発送したがこれまた何らかの理由で、未開梱のまま返送されたものか定かではありません。今後の調査を待つ次第です。



梱包解き作業

梱包を解いて整理して行くと読み取り不能の物も若干ありましたが中身を精査すると、何れも 1955 年から 1957 年にかけて北大チロームが、白滝遺跡を本邦初の学術的な本格調査をした時の成果品であることが判明しました。大部分のロカリティもはっきりしており一級品の遺物であることが素人目にも判りました。しかし残念な事に 1956 年に分については欠落しておりました。出土遺物は一部整理された形跡があるものの、粘性土が付着し採取したままの状態の遺物も多く、これ等の洗浄には、地学・化石グループのボランティアのアメリカ人クルツ先生や同じく甲山さんのお手伝いを受けて洗浄整理を終了し、現在パソコンに入力途上ですが、余りにも膨大な量のためもう少し時間がかかりそうです。

原石の吉谷コレクションと異なり、この北大コレクションは、全て白滝無土器文化時代の人々の作製になるもので、その種類も多岐に渡っております。これ等を

収蔵庫で眠らせるには忍びなく吉谷コレクションと並べてその一部の展示に踏み切りました。

## 化石ボランティア（クリーニング・レプリカ製作班）最近の活動状況

「最近化石ボランティア室は賑やかですね。」博物館スタッフの方、ボランティアの方によく言われます。そう言われると、ここ数カ月で新しく入られた方が結構いるなあ、と思う冬の今日この頃。今回は、化石ボランティア（クリーニング・レプリカ製作班）の最近の活動状況を紹介したいと思います。

化石ボランティア（クリーニング・レプリカ製作班）は、総合博物館3階S324部屋にて活動を行っています。その活動内容は、化石に関わる幅広いものです。現在主にやっている活動は「化石のクリーニング作業（化石標本から余分な岩石を取り除く作業）」と「レプリカ製作作業」の2種類です。



化石ボランティアの活動風景（奥2人がクリーニング、手前2人がレプリカ製作中）

化石のクリーニング作業にもいくつかの手法があります。クリーニング作業初体験という場合、まずハンマ

## 植物ボランティアの活動紹介

植物ボランティアは現在二十数名の方が登録されています。グループ全体の活動は月、火、木の週3日、S308号室で行っております。活動日は多いのですが、各人によって曜日を決めて来られたり、植物の生育期となる夏季にはフィールド観察で多忙のため冬季を中心に活動されたり、時間が空いたときに来られるなどさまざまです。

ここでは植物標本製作の主な作業についてご説明します。植物乾燥標本の貼り付け（マウンティング）、

### 化石ボランティア 石田祐也

ーとタガネを使います。堅い岩石を少しずつ削っていきます。この作業で経験を積んだら、エアー・スクライバーというペンのような形の機械を使う手法にうつることができます。これは、ペンの先に圧縮空気を送って振動させることで化石を削っていきます。この方法だと、ハンマーとタガネでは取り除くことが難しい、化石表面付近の小さな岩石を除去することができます。北大総合博物館で行える最後の手法として、サンドブラスターという機械を使う手法があります。が、難易度の高い手法のため、現在この機械を使ってクリーニングできる方はグループ内にいません。機械はそろっているので、「我こそは！」と思う方は是非化石ボランティアへお越しください。

本年度から行っている活動が「レプリカ製作作業」です。本物の化石からシリコンで型を取り、そこに石膏を流し込んでレプリカを作ります。この段階では真っ白で、一目でレプリカと分かりますが、着色することで本物の化石のようになります（実際私が見分けられなかったことが何度か）。レプリカ製作作業はまだ始まったばかりですが、将来的には完成したレプリカを、研究用や教育普及用として利用していきたいと考えています。

このような作業だけでなく、学生のプレゼンテーション用ポスターを皆で見たり、人生相談をしたりと、活動日のS324は確かに賑やかです。化石ボランティアに興味のある方へ、これだけは言えます。「化石ボランティアは非常に楽しいですよ！」

### 植物・化石・地学ボランティア 甲山幸子

植物標本庫への配架（ソーティング）です。は、貼り付け待ちの植物標本を台紙に専用の紙テープでとめ、ラベルを貼り、透明な保護袋に入れて仕上げます。この作業は、多少のコツといくつかの注意点を覚えていただければ初心者でも始めていただけます。アートセンスがくすぐられ、ゆっくり植物との対話を楽しんでいただけます。は、標本庫に学名順に標本を入れていく作業です。ある程度の植物分類の知識が必要となりますので中級の作業となりますが、慣れた



方と一緒に、また図鑑と仲良く仕事するのも勉強になり楽しいものです。

今年のトピックスとしましては、前世紀前半採集になる膨大な理学部からの移管標本の整理がありました。なにしろ古い標本ですので、ほこりやカビを丁寧に処理しながらの作業でしたが、みなさんの努力によって、配架作業もほぼ完了いたしました。これらコレクションの中には、早田文蔵元東大教授寄贈標本、既に収蔵されていたスゲ属植物標本とは別の、タイプ標本を含む秋山茂雄元北大教授のコレクション、野田光蔵元北大教授の中国東北部標本などが含まれていました。

北海道大学総合博物館の植物標本庫は、宮部金吾初代植物学教授の標本をはじめ、札幌農学校時代以来の北大農学部所蔵のコレクションが母体となっていました。今回の追加により、さらに貴重な昔からの維管束植物標本が加わった事になります。

夏場には空調が効き、冬には暖かい作業室で、図鑑に囲まれじっくりと植物の多様性に触れ、また古今の専門家の方々の業績に接する機会は得がたいものです。興味をお持ちの方は、ぜひお気軽に S308 にお越しください。

\*\*\*\*\*

## 談話会報告:事務局

今年度の談話会は、4回開催しました。第1回 諏訪正明名誉教授・資料研究員の「ハエのはなし」については、本ニュース 14号で報告しましたので、ここでは第2～4回についての報告をします。(文責 永山)

### 第2回 2009年11月6日(金)「きのこあれこれ」 講師 小林 孝人さん(博物館研究員)

いつもきれいなキノコの写真を見せて下さる小林さん。昨年は野幌自然公園で観察会をして、大好評だったので、今年もと思っておりましたが、チャンスがなく実行出来なかったのが、今年は写真を中心にお話していただきました。どれも素敵な写真で思わず“食べられるの?”と聞きたくなかった人もいたほど。

大学構内にもたくさんのきのこがはえていて、何冊か本も出ています。今度は構内で観察会が出来たらいいなと思っています。談話会終了後のきのこ汁は都合で出来なくなってしまい、残念。こちら次回に期待しましょう。

### 第3回 2009年12月11日(金)「JICAシニア海外ボランティアからみたフィジー諸島共和国」

#### 講師 八木田 道敏さん(図書ボランティア)

退職してから、JICAシニア海外ボランティアとしてフィジーで金融関係ボランティアに2年弱参加した八木田さん。共通語の英語は在職中から、ぼつぼつ勉強していたけど、なかなか通じなくて困ったことも。フィジーは年中果物があふれ、野外で寝ても暮らせる南国の楽園。しかし、国も人々もあまり豊かとはいえない。「働いてお金を貯める」私たちの世界では当たり前だが理解できない世界。何とか事業の仕組み、経済の仕組みを教え、暮らしを向上させたいと土地の人たちと一緒に行動したそうです。ノーベル賞のグラミン銀行の仕組みや影響あるいはフィジー諸島の人たちがどこから来たか、など活動する中で得られた貴重な体験をお話していただきました。

### 第4回 2010年2月5日(金)「水とのかかわり」 講師 児玉 諭さん(展示解説ボランティア)

1. 明治のお雇い技術者のデ・レーケが驚いて「これは滝だ」と言った日本の川の特徴
2. 洪水への対応が「凌ぐ」から「防ぐ」へと変化したこと
3. 温暖化なのか、いままでと違う雨の降り方
4. 最近の災害死亡事例から「なぜ防げなかったか」

ダム建設関係の仕事に携わっている児玉さんが、ご自分の見てきた様々な“みず”についてたくさんの資料を用意してわかりやすく解説してくれました。

特に最近起こった大雨で避難中に用水路に転落して死者がでた災害では、日常に潜む危険性と日ごろの心がまえについていろいろ考えさせられる事例でした。

\* ボランティア・ニュースは博物館のホームページからもご覧になれます。

<http://www.museum.hokudai.ac>

## ボランティア・ニュース

編集・発行

北海道大学総合博物館ボランティアの会  
(担当者:星野、沼田、安田、永山)

発行日:2010年3月1日

連絡先

〒060-0810 札幌市北区北10条西8丁目  
Tel: 011-706-4706